

筑前国続風土記において貝原益軒が記録した福岡県の淡水魚類

中島 淳

福岡県保健環境研究所 〒818-0135 福岡県太宰府市向佐野 39 E-mail cyprin@kyudai.jp

キーワード:九州 本草学 自然史 自然再生 魚類相

2013年4月12日受付 2013年5月2日受理

要旨 江戸時代の自然史学者・貝原益軒が1688年から1709年にかけて編纂した筑前国続風土記における福岡県内の淡水魚類に関する記述を精査した。その結果、24分類群(魚類, 両生類)についての記述が認められ, 少なくとも21分類群については種あるいは属まで同定することができた。また, 本書の記録からこの300年間で通し回遊魚であるアユ, サクラマス, サケ, ウグイの生息地が減少していることがわかり, 本書が福岡県の過去の魚類相を知る上で重要な資料であることが確認された。

はじめに

貝原益軒(1630-1714年)は筑前国福岡藩, 現在の福岡県福岡市に生まれた人物で, 江戸時代随一の本草学者・儒学者として知られる(上野 1991)。江戸時代の本草学は海外書物の模写が中心であり必ずしも日本の実情にあったものではなかったが, 貝原は自身の博物学的著作において自ら情報収集したものについて詳細な記載を行なうと同時に, 既往の知見と比較しつつその違いについて客観的に考察するという手法をとった。このことから, 日本における初の自然科学者として現在でも高く評価されている(中西 1961, 上野 1991)。

筑前国続風土記は1688年(元禄元年)から1709年(宝永6年)にかけて編纂された書物で, 主に現在の福岡県西部地域にかかわる様々な事象(文化, 歴史, 地誌, 自然史)を網羅的に記録・解説しており, 当時の状況を知る上できわめて重要な資料となっている(学校法人中村学園 2012)。そして, 本書中には淡水魚類についても詳しい記述があり, 当時の淡水魚類の生息状況を知る上で第一級の資料と考えられる。しかしながら, これまで生物学的な観点からその内容が精査された例はない。

日本国内では2003年に自然再生推進法, 2005年に外来生物法, 2008年に生物多様性基本法が相次いで施行され, 生物多様性の保全・再生の重要性が社会的に認知されつつある。この中で, 自然再生推進法では「過去に損なわれた生態系その他の自然環境を取り戻す」ことを「科学的知見に基づいて実施」という方

針を明記している。また、地域固有の生物多様性の復元を目的とした自然再生事業に際しては、その目標設定において「どの範囲(場所)で、いつの時代に、どのような理由で、何が失われたか」を具体的に把握することがきわめて重要であることも指摘されている(日本生態学会生態系管理専門委員会 2005)。したがって、過去の文献類における生物分布情報を科学的な見地から精査し整理することは、自然再生事業等を行なう上で有用な情報をもたらすと考えられる。

そこで、本報では貝原益軒が記した筑前国続風土記の中から淡水魚類に関する記述を抽出し、当時の淡水魚類の生息状況について整理を行なうとともに、現在の状況との比較を行なった。

表 1. 筑前国続風土記の川魚類の頁に記載されている種名と生息地および該当する現在の種名と生息地。

同書に記される種名(読み)	標準和名	生息地として記される場所(現在の該当する河川・地域)
1 腹赤魚(はらか?)	サクラマス	上座川(朝倉市・うきは市付近の筑後川)
2 榎の葉(えのは)	ヤマメ	秋月のおく(朝倉市秋月野鳥周辺)、江川(朝倉市江川付近の筑後川水系小石原川)、那珂郡五ヶ山(那珂川町五ヶ山付近の那珂川)、早良郡川上(不明)、怡土郡飯場(福岡市早良区飯場付近の室見川)
3 鱒(あゆ)	アユ	那珂川、早良川(室見川)、糟屋川(多々良川)、秋月川(筑後川水系小石原川)、上座川(朝倉市・うきは市付近の筑後川)、下座郡美那宜川(筑後川水系佐田川)、鞍手郡若宮川(宮若市沼口付近の遠賀川水系山口川)、吉川河(宮若市福丸より上流の遠賀川水系犬鳴川)、大賀畑川(遠賀川水系犬鳴川支流の八木山川)、嘉摩郡大隈川(嘉麻市大隈町付近の遠賀川)、穂波郡飯塚川(桂川町・旧筑穂町付近の遠賀川水系穂波川)、怡土郡井原川(瑞梅寺川)、御坂川(糸島市三坂付近の雷山川?)、御笠郡平等寺川(筑後川水系宝満川支流の山口川)、よしき川(筑後川水系宝満川)
4 鯉(こい)	コイ	上座川(朝倉市・うきは市付近の筑後川)、遠賀川(遠賀川下流域)、宗像川(釣川)、宗像郡江口川(釣川下流)
5 鯽魚(ふな)	フナ	所々河池、糟屋郡千鳥が池(古賀市千鳥ヶ池)、糟屋郡鹿府池(古賀市鹿部大池※現在は消滅)、志摩郡志登村(糸島市志登)
6 河鱸(かわすずき?)	スズキ	遠賀川(遠賀川下流域)、黒崎大渡川(江川)
7 みづくり	オヤニラミ	山川
8 かまつか	カマツカ	沙川
9 石鮒魚(あさぢ)	カワムツ	山川
10 鯊魚(はぜ)	マハゼ	海濱、海に近き砂川
11 杜父魚(かじか)	ドンコ	所々の川
12 うろゝこ	ヨシノボリ属?	山川
13 鱒絲魚(ぎぎう)(黄)	ギバチ属	川池
14 鱒絲魚(ぎぎう)(赤)	アカザ	川池
15 鱒魚(いさざ)	ピリンゴもしくはカジカ(中卵型)	那珂郡早良川(室見川下流域)
16 麴條魚(しろうを)	シロウオ	早良川(室見川)、那珂川、糟屋川(多々良川)
17 鱒残魚(しろうを)	シラウオ	那珂川、早良川(室見川)、蘆屋川(遠賀川河口域)
18 いだ	ウグイ	糟屋川(多々良川)
19 鯢魚(さんせう)	サンショウウオ類	糟屋郡金井手川(多々良川)、那珂川、上秋月野鳥川(筑後川水系小石原川支流の野鳥川)、嘉摩郡馬見川(遠賀川水系屏川?)
20 鰻魚(さけ)	サケ	遠賀川(遠賀川下流域)、早良川(室見川)、宗像川(釣川)
21 はゑ	オイカワ他	-
22 鰻驪(うなぎ)	ウナギ	-
23 鱧(なまづ)	ナマズ	川池
24 金魚(きんぎょ)	キンギョ	人家に多く養ふ

方法

筑前国続風土記にはいくつかの写本が知られているが、ここでは学校法人中村学園(2012)がホームページ上で全文公開を行なっている明治 43 年刊行の「益軒全集巻之四」を用いた。淡水魚類については「筑前国続風土記 卷之二十九 土産考 上」の中の「河魚類」に記述されている生物を抽出し、現在の

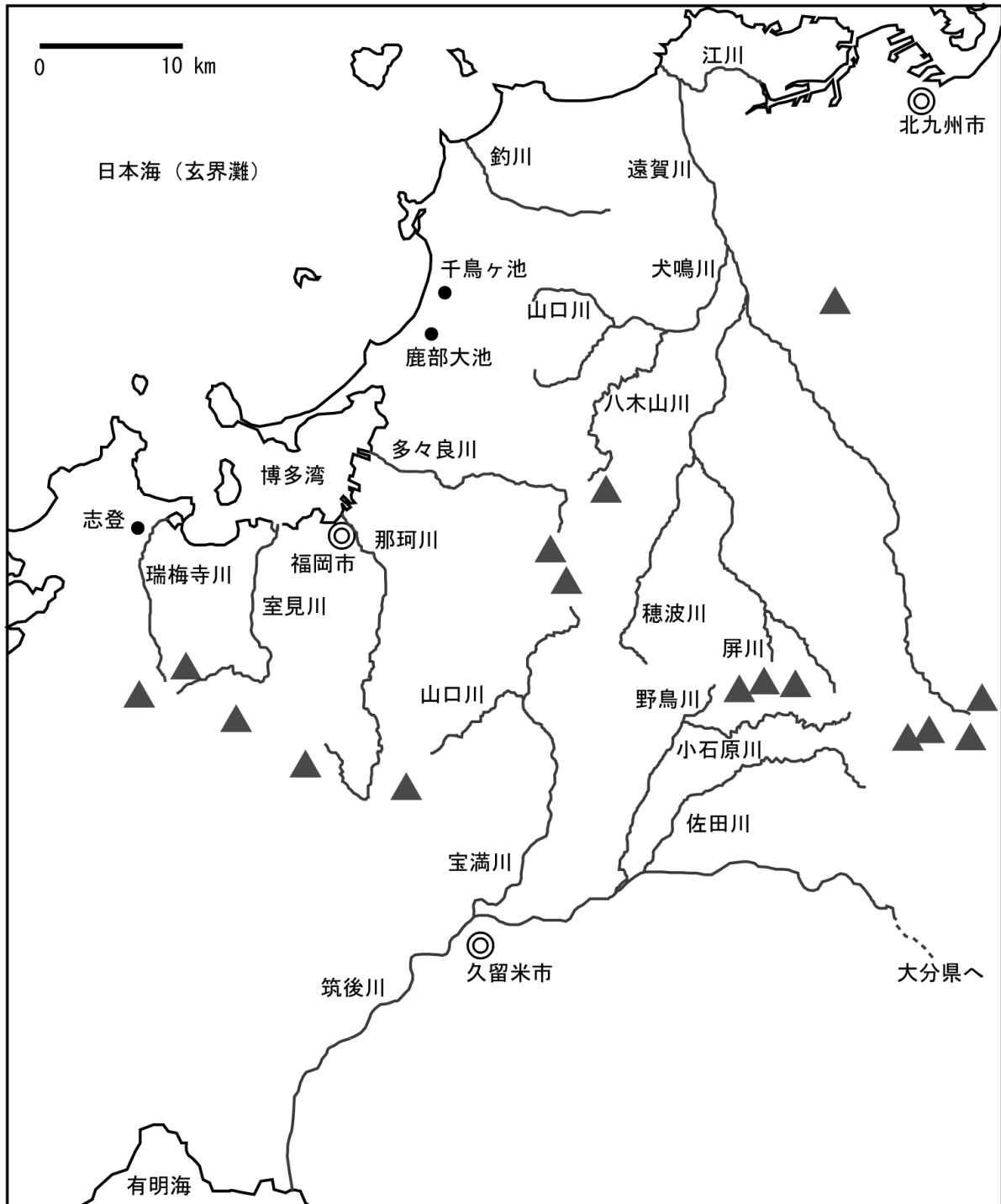


図 1. 筑前国続風土記において「河魚類」の生息地として挙げられている河川と地域(●). ▲は主要な山塊, ◎は主要な都市.

分類体系での同定を試みた。種の同定・学名は基本的に中坊(2013)に従った。また、文章中で示されている河川名・地域名については、「筑前国続風土記 卷之二 堤要 下」の記述を参考にして、現在の河川名・地域名と照合した。以上の作業により、筑前国続風土記中における淡水魚類とその生息状況の記録を整理した。

結果および考察

精査の結果、筑前国続風土記には「河魚類」として 24 分類群についての記述があることがわかった(表 1)。また、それぞれの産地として具体的に挙げられていた河川・地域のうち、22 河川・地域については現在の河川・地域として特定が可能であった(図 1)。以下に「河魚類」として挙げられている 24 分類群についてその内容をまとめた。

1. 腹赤魚(はらか?) = サクラマス *Oncorhynchus masou masou*

「鱒」であると記されており、「春月是を取」との記述や、次に記されている「榎の葉」が「鱒とは別」とされていることから、春に河川を遡上する生態を持つ回遊型のサクラマスのことを指すものと考えられる。「今上座川に在」と記されているので、当時に筑後川中流域と有明海を行き来する個体群が存在したことを示唆する貴重な記録である。

本文には「昔太宰府より朝廷に貢せし」とあり、これは古代にあった「腹赤の奏(はらかのそう)」と呼ばれた儀式のことを指すものと考えられる。この儀式については、平安時代末期に作成されたとする作者不詳の軍記物語である源平盛衰記の卷之二十五において、天智天皇が皇太子時代に筑後地域を来訪した際に「はらか」を食べた話が基とされており(古谷 1910)、古くからこの地域で何らかのマス類が採集され食用にされていたことが伺われる。

これまでに筑後川における回遊型サクラマス個体群の存在は記録されていないが、青柳(1957)は筑後川水域から海産型のマスを記録しており、木村・塚原(1969)は有明海流入河川においても条件によっては回遊型の生活史を持つ可能性を指摘している。したがって、本書の記述とあわせて考えると、1700 年頃には筑後川に回遊型サクラマス個体群が存在していた可能性は高い。

2. 榎の葉(えのは) = ヤマメ(サクラマス) *Oncorhynchus masou masou*

現在でも九州ではヤマメのことをエノハと呼んでいる。特定できる生息河川として「秋月のおく(朝倉市秋月付近の筑後川水系野鳥川)」、「江川(朝倉市江川付近の筑後川水系小石原川)」、「那珂郡五ヶ山(那珂川町五ヶ山付近の那珂川)」、「怡土郡飯場(糸島市飯場付近の室見川上流)」が挙げられている(図 2)。本種は水産有用種であり、1961 年に東京都水産試験場において種苗生産技術が確立された後(本荘・原 1973)、福岡県内では 1970 年代以降に放流事業が盛んに行なわれたことが知られている(林ほか 1974, 福岡県環境部自然環境課 2001)。そのため県内における自然分布の実態については不明な点が多い。本書に残る記録は本種の確実な自然分布地域の記録であり、重要な知見である。なお、

本書では前述の「鱒」とは別種としているが、ヤマメはサクラマスの一生活史型(陸封型)である(中坊 2013).

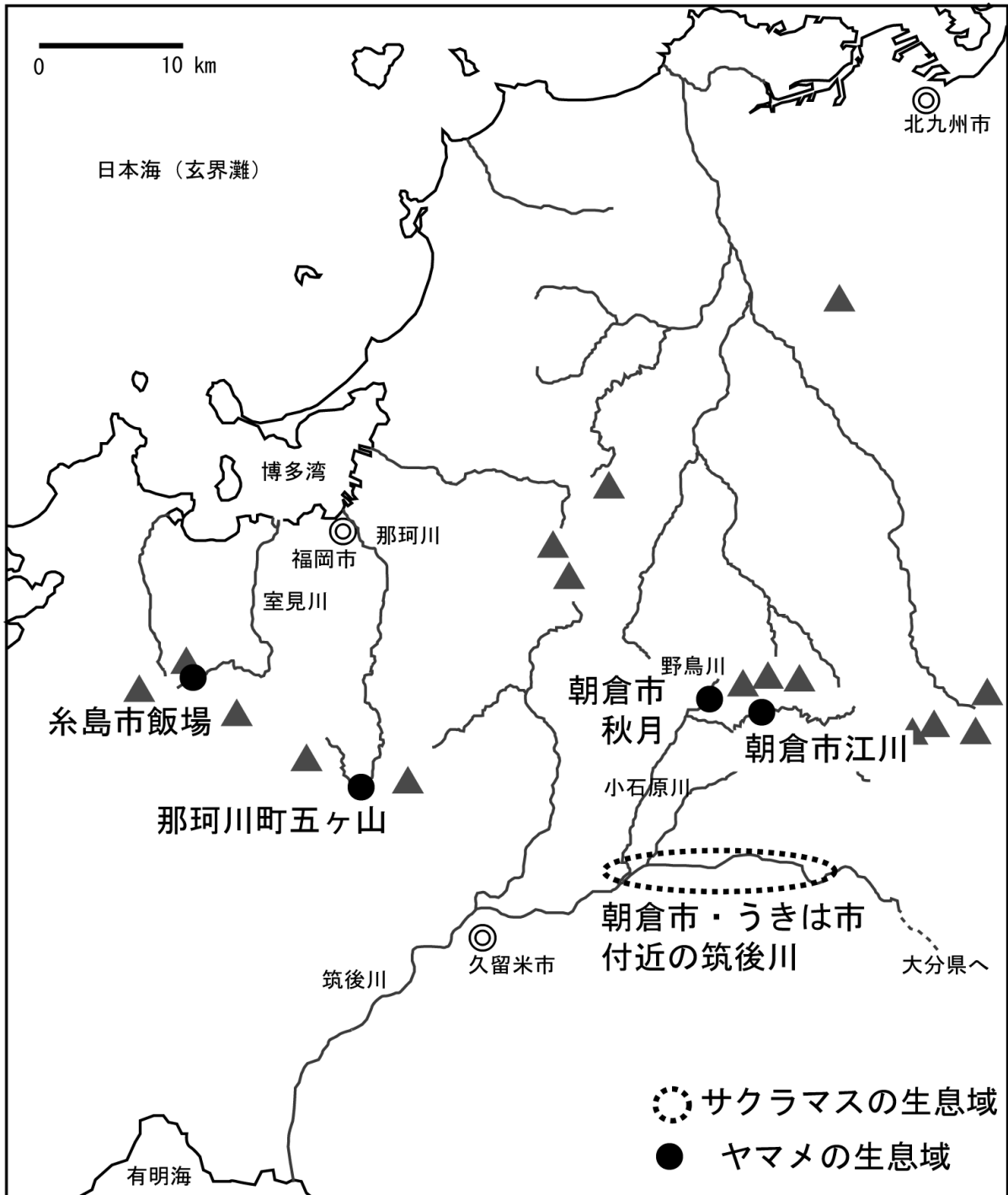


図 2. 筑前国続風土記において記されているサクラマスとヤマメの生息域.

3. 鱒(あゆ) = アユ *Plecoglossus altivelis altivelis*

本書「河魚類」の項目中、15 箇所の産地が列記されており(表 1)、江戸時代においても本種が重要な

漁業対象種であったことが伺われる。また、同じ「筑前国続風土記」の「卷之二 堤要 下」の「河水記」の頁においてもアユの産地に関する記述がある。ここでは「上座、下座の千年川(筑後川中流域、下流域)」、「下座郡美奈宜川(筑後川水系佐田川)」、「夜須郡秋月川(筑後川水系小石原川)」、「那珂川」、「糟屋川(多々良川)」、「筵内川(大根川)」、「鞍手郡若宮川(遠賀川水系犬鳴川支流の山口川)」、「吉川川(宮若市福丸付近より上流の遠賀川水系犬鳴川)」、「大賀畑川(遠賀川水系犬鳴川支流の八木山川)」、「嘉摩郡大隈川(嘉麻市大隈付近の遠賀川)」、「漆生川(遠賀川水系山田川)」、「御笠郡平等寺川(筑

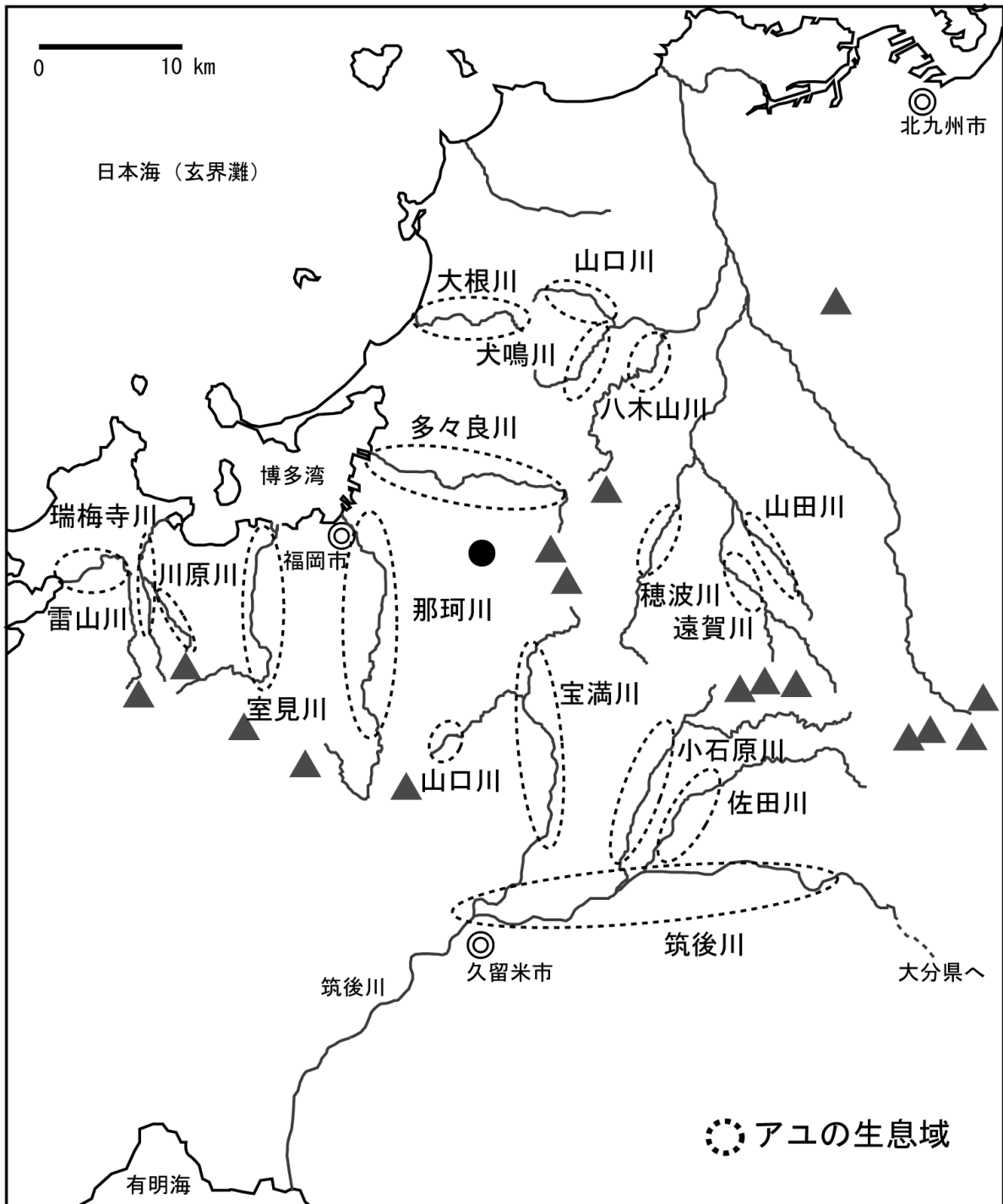


図 3. 筑前国続風土記において記されているアユの生息域。

後川水系宝満川支流の山口川)」、「蘆城川(筑後川水系宝満川)」、「早良川(室見川)」、「怡土郡高租川(瑞梅寺川水系川原川)」、「井原川(瑞梅寺川)」、「雷川(雷山川)」を産地として挙げており(括弧内は現在の河川名)、これら以外の小流ではアユが少ないと記されている。これらの記録をまとめると、当時、福岡県内のアユの生息水系として遠賀川、大根川、多々良川、那珂川、室見川、瑞梅寺川、雷山川、筑後川の8水系が代表的であったことが伺われる(図3)。しかしながら、貝原が産地として挙げた8水系のうち、現在でも安定した天然遡上と再生産が認められるのは筑後川本流のみである(福岡県環境部自然環境課 2001)。

本書ではアユについての詳細な解説も付記されており、食味として「秋月江川(朝倉市江川付近の筑後川水系小石原川)」が最上であるとしており、次いで「平等寺川(筑後川水系宝満川支流の山口川)」、「よしき川(筑後川水系宝満川)」のものが良いとしている。また、本種の漁法として「投網、趕網(さであみ)、攪網(くみあみ)」を用いる他、小河川では主に「筍(うけ)」を、筑後川水系の深い場所では船に乗り鵜を用いて採る漁法などが記されている。また、春の遡上期と秋の降河期には特に築(やな)と筍(うけ)を用いることも記されている。このうち「攪網」とはタモ網のことであるが、「くみあみ」との読みがなされていることから、アユを寄せ網で一箇所に集めてタモ網ですくい取る「汲み鮎」漁法的一种であると考えられる。また、鵜を使ったアユ漁については、現在でも朝倉市原鶴付近の筑後川において観光用に実施されている。なお、通常「鱒」の字は「はや」と読むが、本書における「鱒」の解説は「春は海と川との境より川上にさか上る」、「秋の末にさびあゆと成」、「潮と水との境、沙石に子をうみ付置いて」、「年魚と名付く」となっていることから、これは間違いなく「アユ」を指している。

4. 鯉(こい) = コイ *Cyprinus carpio*

筑後川中流域、遠賀川下流域、釣川における分布を記録している。「近年國中の池塘に是を養う故、所々に鯉魚多し」、「小川故鯉多からず」などの記述から、福岡県内ではもともと大規模な水系にしか生息していなかったことが伺われる。なお、味が最も良いのは釣川のものであるとの記述もある。

5. 鯽魚(ふな) = フナ属の一種 *Carassius* sp.

「所々河池に在」との記述から県内に広く分布していたことが伺われる。食味が良いものとして「千鳥が池(古賀市千鳥の千鳥ヶ池)」、「鹿府池(古賀市美明の鹿部大池)」、「志摩郡志登(糸島市志登)」のものを挙げている。ただし、このうち鹿府池(鹿部大池)は区画整備事業により2000年頃に埋め立てられて現存しない(納富育代 私信)。本書では特に千鳥ヶ池のものについて、大型で味が良く江戸や京都でもこれほどのものはないと絶賛している。貝原は江戸や京都へ実際に遊学した経験があることから(上野1991)、いずれも食べ比べた上での経験談と思われる。

なお、福岡県内では在来のフナ類としてギンブナ *Carassius langsdorfii* とオオキンブナ *C. buergeri* の2種の分布が記録されている(中島ほか 2006)。そして、美味なフナの産地として挙げられている「鹿府池」は大根川水系に含まれるが、この水系には典型的なオオキンブナの生息が確認されており(中島ほか 2004)、食味と何らかの関係があるのかもしれない。

6. 河鱸(かわすずき?) = スズキ *Lateolabrax japonicus*

「遠賀川(遠賀川下流域)」と、「黒崎大渡川(江川)」における分布を記録している。福岡県沿岸には同属のヒラスズキ *L. latus* も多く生息するが(Kurita & Inui 2012), 生息域からみて本種に該当するものと考えられる。「海鱸(海産のスズキ)」よりも美味で、夏から秋の初めが最も味が良いとしている。なお、本種の説明文中で「河鰯(河川域のボラ *Mugil cephalus*)」もスズキ同様、海のものより川のものの方が美味としているのは興味深い点である。

7. みづくり = オヤニラミ *Coreoperca kawamebari*

「山川に在」、「鮒に似て小」、「色は黄黒」、「河めばると伝」との記述からオヤニラミに該当すると思われる。文章中に「水をくるが如し」とあるように、胸鰭を複雑に動かして泳ぐ様にちなんだ呼び名と思われる。なお、オヤニラミの地方名として有名な「ミツクリセーベ」(おそらく水繰り清兵衛の意)は、福岡県柳川市周辺の地方名であり(木下 1928), 本書の「みづくり」と同系統の地方名であると推察される。

8. かまつか = カマツカ *Pseudogobio esocinus*

「沙川に在」、「はぜに似」、「水中にうかばず」、「半ば砂中にかくる」などの記載は本種の生態的特徴をよく示している。なお、筑後川・矢部川流域では本種の地方名として「かまつか」が一般的である(木下 1928, 中島 2010)。「脰とすべし」とあり、食用にされていたことがわかる。

9. 石鰻魚(あさぢ) = カワムツ *Candidia temminckii*

「山川に在」、「はゑに似て大」、「口赤し」などの記述からカワムツに該当すると思われる。「脰にして味よし」とあり、食用にされていたことがわかる。文章中に別名として「山ふちはゑ」とあり、この地方名は福岡県内ではこれまで知られていないものであるが(澁澤 1958, 中島 2010), 本種の生態的特徴をよく捉えた名称であると言える。

10. 鯊魚(はぜ) = マハゼ *Acanthogobius flavimanus*

「海濱及海に近き砂川に多し」とあり、概ねマハゼのことを指すと思われるが、よく似た種類が多いため実際には複数の近縁種と混同されていた可能性が高い。

11. 杜父魚(かじか) = ドンコ *Odontobutis obscura*(?), もしくはカジカ *Cottus pollux*(?)

「方言にどんほと伝」、「よくなく也」、「はぜに似て、色黒く口廣し」とあることから、本県内の河川で広く一般的に見られるドンコを指す可能性が高い。しかし、本文中では近江の「うたうたひ」、京都の「だんぎほう」と同じとしており、澁澤(1958)は「ウタウタヒ」「ダンギボウズ」をカジカの地方名としている。ただし、いずれの地方名も貝原の「日本釋名(1699年刊)」、「大和本草(1709年刊)」を参照しており、貝原自身がドンコとカジカを混同していた可能性も高い。実際にはこの両種は亜目レベルで異なり詳細に見れば形態的な差異は大きいものの、模様などの特徴は一見してよく似ており、両種が生息する地域においても混同されていることが多い。

12. うろこ＝ヨシノボリ属の一種 *Rhinogobius* sp.

種の特定には至らなかったが、「杜父魚に似たり」、「京にてごりと伝」、「美味」、「山川に多し」といった記述から、福岡県内の河川に広くみられるヨシノボリ類に該当すると思われる。なお、福岡県内の山地溪流ではトウヨシノボリ(クロダハゼ) *Rhinogobius kurodai*, オオヨシノボリ *R. fluviatilis*, カワヨシノボリ *R. flumineus* の3種が一般的である(中島 淳 未発表)。その他、県内にはクロヨシノボリ *R. brunneus*, シマヨシノボリ *R. nagoyae*, ルリヨシノボリ *R. sp. CO*, シマヒレヨシノボリ *R. sp. BF*, ゴクラクハゼ *R. giurinus* も分布している。

13. 鯿絲魚(きぎょう)(黄)＝ギギ *Tachysurus nudiceps*, もしくはアリアケギバチ *T. aurantiacus*

「鯿絲魚(きぎょう)」の説明として「黄赤二種有」としており、いずれも「なまづに似」、「ひげ有」、「口のはたにはり有」、「人をさす」としている。このうち「黄」の方はギギもしくはアリアケギバチに該当すると思われる。本書に登場する水系では遠賀川水系にギギが、那珂川水系と筑後川水系にアリアケギバチが自然分布する(中島ほか 2006)。しかし、貝原はこの2種を区別していないものと思われる。

14. 鯿絲魚(きぎょう)(赤)＝アカザ *Liobagrus reinii*

前述の特徴と、「赤」という体色からアカザに該当すると思われる。

15. 鱒魚(いさざ)＝ビリンゴ *Gymnogobius breunigii*(?) もしくはウツセミカジカ *Cottus reinii*(?)

記述があいまいで種の特定はできなかったが、「那珂郡早良川に産す」、「其長寸にみたず」、「二三月川下よりむらがり上る」、「近江の湖、越前の敦賀などにも多し」、「はぜの子也」などの記述から、ハゼ科のビリンゴもしくはカジカ科のウツセミカジカのいずれかである可能性が高い。なお、室見川(文中の早良川)は福岡県の日本海側で唯一ウツセミカジカ(回遊型カジカ)の記録がある河川であるが(水野・丹羽 1961)、現在は絶滅したものと考えられている(福岡県環境部自然環境課 2001)。

16. 麴條魚(しろうを)＝シロウオ *Leucopsarion petersii*

「二三月・海より川へ上る」、「魚梁を構へ」、「其長さ一寸」などの記述からシロウオに該当する。本種の生息河川の一つとして挙げられている室見川(文中の早良川)は、現在でもシロウオの築漁が早春の風物詩として有名である。食味について、後述する「シラウオ」より劣るとしているのは興味深い。

17. 鱒残魚(しろうを)＝シラウオ *Salangichthys microdon*

前述した「シロウオ」より大型であるとする点、江戸、大阪、桑名の白魚を同じ種としていることなどから、シラウオに該当するものと考えられる。

本文中に「昔は此國になし。忠之公の時、上方より其子を多く取よせて・(中略)・はなさせ給ふ」という記述があり、筑前福岡藩の2代目藩主・黒田忠之(1602-1654年)が放流したものが定着したとしているが、生物学的な見地から福岡県内のシラウオ個体群が人為移植に由来するものとは考えにくい。この「白魚をとりよせてまく逸話」は江戸時代にはよく知られていたものであるようで、平戸藩主・松浦静山

(1760-1841年)の記した随筆集「甲子夜話」には、「徳川光圀(1626-1700年)が江戸の隅田川から持ち帰った白魚の種を常陸の川に埋め、それが現在も生育している話」と、「徳川吉宗(1684-1751年)が享保年間(1716-1735年)に伊勢から取り寄せた白魚の種を品川にまき、それが東京湾の白魚の起源となった話」が記されている(今井 2009). 中西(1961)は筑前国続風土記中において、貝原が「君」であるところの黒田氏の徳を称える記述を意図的に多くしていることを指摘しており、当時よく知られていた徳川家とシラウオにまつわる逸話をあえて黒田家に重ねて記録に残すことで、「君」の徳を称えるという目的があったのかもしれない。

18. いだ=ウグイ *Tribolodon hakonensis*

「ぼらに似」、「海にも有」などの記述からウグイに該当すると思われる。また、九州ではウグイの地方名としてイダが一般的である(澁澤 1958, 中島 2010). 福岡市・糟屋郡を流れる多々良川(文中の糟屋川)に生息するとあるが、近年の採集例はない(木村ほか 1986, 鬼倉ほか 2006). 1960年代までは九州北部日本海側の博多湾から唐津湾にいたる水域には、海と川を行き来する回遊型の生活史を有するウグイが分布していたことが知られており(多部田・塚原 1964), 堰等の横断構造物の建設により該当する個体群は多々良川水系から消滅したものと考えられる。

なお、本文中で「江州にてみごいと伝」、「武蔵上野にてはさいと伝」とあるが、これはいずれもニゴイ *Hemibarbus barbus* の地方名である(澁澤 1958). しかし、ニゴイは福岡県の日本海側に自然分布しておらず(中島ほか 2006), 説明文もニゴイに当てはまらないので、この部分についてはニゴイとウグイの地方名を混同しているものと思われる。

19. 鯢魚(さんせう)=サンショウウオ属の一種 *Hynobius* sp.

「鯢魚」は一般的にサンショウウオのことを指し、「山川に在」の記述から流水性の小型サンショウウオ類に該当するものと考えられる。福岡県内では流水性サンショウウオ属としてブチサンショウウオ *Hynobius naevius* とコガタブチサンショウウオ *H. yatsui* の2種が自然分布しており(Tominaga & Matsui 2008), このいずれかに該当するものと思われる。ただし、「大小有」ともしているので、オオサンショウウオ *Andrias japonicus* も含まれる可能性もありうる。なお、福岡県内でのオオサンショウウオの確実な生息地は県東部の今川水系十津川のみであるが(大内 1961), 1956年の採集例が最後で、現在は絶滅した可能性が高い(林ほか 1974, 福岡県環境部自然環境課 2001)。

20. 鰻魚(さけ)=サケ *Oncorhynchus keta*

遠賀川, 室見川, 釣川における分布が記録されている。「極て稀」としているが、「肉色味共に関東におとらざるも有」とあるので、それなりに採れていたものと推察される。

福岡県を含む九州北部地域はサケの生息域の南限・西限域とされ(大島 1957, 吉田・伊藤 1957, 中島 1976, 木村 1981), 貝原による本記録もこれらの知見を支持するものである。しかし、現在では遠賀川を中心とした地域で積極的に種苗放流が行なわれているものの(遠賀川源流サケの会 2012), 安定した再生産は確認されておらず野生絶滅の状態が続いている(福岡県環境部自然環境課 2001)。

なお、嘉麻市大隈町の遠賀川近傍にある「鮭神社」は、769 年創建とされる古い神社であり、サケを神として祭る全国的にもきわめて珍しいものであるが(アクロス福岡文化誌編纂委員会 2012)、貝原は「筑前国続風土記 卷之十二 嘉摩郡 穂波郡」において「鰻大明神」として、本神社について言及している。

21. はゑ＝オイカワ *Opsariichthys platypus* など(?)

「其品多し」とあるだけで、詳細については記述していない。福岡県内では特に筑後川・矢部川流域においてオイカワが漁業対象種として重要である(中島 2010, 佐野ほか 2008, 佐野 2009, 2011)。その他の福岡県内のハヤ類としては、前述したカワムツ、ウグイの他に、タカハヤ *Rhynchocypris oxycephalus*, ヌمامツ *Candidia sieboldii* が自然分布している(中島ほか 2006)。貝原の代表的な博物学書である「大和本草」では、「ハエ(魚偏に夏の字)」の説明として「白ハエ」、「赤ハエ」、「アフラハエ」を挙げている。これはそれぞれオイカワ、カワムツ、アブラハヤ類(アブラハヤ及びタカハヤ)を指すものと考えられ、この点からも本書中での「はゑ」は複数種の混称であることが明らかである。

22. 鰻驪(うなぎ)＝ニホンウナギ *Anguilla japonica*

「又うみうなぎあり」と記述されているが、詳細については不明である。

23. 鯪(なまづ)＝ナマズ *Silurus asotus*

「處々川池に多し」とあり、身近に多くみられたことが伺われる。

24. 金魚(きんぎょ)＝キンギョ *Carassius auratus*

「元和中異國より渡る」とあり、元和年間(1681-1683 年)に持ち込まれたことが記されている。日本国内でのキンギョの渡来履歴として、文亀年間(1501-1503 年)に初めて持ち込まれ、その後、元和年間に再度持ち込まれたことが知られているので(松井 1936)、本書での記述はこの二度目の移入を記したものと考えられる。「今は人家にて多く養ふ」ともあるので、キンギョの飼育が当時の福岡県内で比較的普通に行なわれていたことを示す興味深い記述である。

自然史資料としての筑前国続風土記

本調査により筑前国続風土記の「河魚類」の頁には 24 分類群についての記述があり、そのうち現在の分類群に特定できるのは、サクラマス、ヤマメ、アユ、コイ、フナ属の一種(ギンブナもしくはオオキンブナ)、スズキ、オヤニラミ、カマツカ、カワムツ、マハゼ、ヨシノボリ属の一種、ギギ属の一種(ギギもしくはアリアケギバチ)、アカザ、シロウオ、シラウオ、ウグイ、サンショウウオ属の一種(ブチサンショウウオもしくはコガタブチサンショウウオ)、サケ、ウナギ、ナマズ、キンギョの 21 種であることがわかった。

本書「河魚類」のうち、明確に食用として紹介されているのはサクラマス、ヤマメ、アユ、コイ、フナ属の一種、スズキ、カマツカ、カワムツ、ヨシノボリ属の一種、シロウオ、シラウオ、サケの 12 種、薬用として紹介されているのがサンショウウオ属の一種、鑑賞用として紹介されているのがキンギョであり、残りの 10 種の

うちウグイについてのみ「不味」とされているものの、他の 9 種については特にその利用法が記されていない。このことから、本書における「河魚類」の項目において貝原が目指したのは、必ずしも人にとって有用な種の紹介ではなく、福岡藩域の陸水域にみられる主要な魚類を網羅的に紹介するという、言わば「自然史の記載」を明確に目的としていたものと考えられる。

過去の生物分布資料としての価値とその利用

特定の生息河川の記録があり、現在の分類群として特定できたのはサクラマス、ヤマメ、アユ、コイ、フナ属の一種、シロウオ、シラウオ、ウグイ、サンショウウオ属の一種、サケの 10 種であった。1700 年代初頭の福岡県周辺の河川性生物について、その生息地を具体的に照合できる資料はほとんど現存せず、本書が福岡県における過去の生物分布資料としてきわめて価値が高いことが明らかとなった。

このうち、現在の生息状況と比較して特に大きな違いがあるのはアユ、サクラマス、サケ、ウグイの 4 種で、本書でこれらの生息地とされた河川のうち筑後川本流のアユ以外は安定した再生産が認められる個体群が現存しない(福岡県環境部自然環境課 2001)。この 4 種はいずれも海と川を行き来する通し回遊型の生活史を有するという点が共通しており、絶滅した主要因は河川横断構造物による移動阻害である可能性が高い。実際に、この他にも福岡県内ではウツセミカジカやイトヨ *Gasterosteus aculeatus* といった通し回遊型の生活史を有する魚類が絶滅もしくは絶滅寸前となっている(福岡県環境部自然環境課 2001, 中島・鬼倉 2009)。これらのことから、本書に記されている内容と現在の状況を比較すると、本書の出版から今日にいたるまでの 300 年間に特に通し回遊魚にとっての生息環境が大きく悪化したと考えられる。

近年、国内では海と川を行き来する河川性生物の生息状況を好転させることを目的として、いくつかの河川を指定して「魚がのぼりやすい川づくりモデル事業」が開始されている(国土交通省河川局 2005)。このような自然再生事業を行なう上で、自然再生推進法では「過去に損なわれた自然環境を取り戻す」ことや「科学的知見に基づいて実施」することを明記している。したがって、今回、アユ、サクラマス、サケ、ウグイについては絶滅河川が明らかになったことから、こうした河川においてはこれらの種の復元を自然再生の指標とすることが考えられる。すでに遠賀川ではサケをシンボルにして回遊性魚類の生息環境回復を目的とした事業を実施しているが(国土交通省九州地方整備局遠賀川河川事務所 2003)、本報の結果から遠賀川でサケをシンボルにした自然再生は生態学的に問題が少ないといえる。ただし、サケあるいはアユは地域ごとに遺伝的な変異が認められることから(Sato et al. 2004, 佐藤・山本 2010, 武島 2010)、個体群の回復を放流によって行なう場合には、放流ガイドライン(日本魚類学会 2005)に従い遺伝的多様性にも十分配慮した科学的な進め方が必要不可欠である。海域を移動できる回遊性魚類の場合は分布拡大能力も比較的高いので、本来であれば放流などは行わずに、環境改善の後、近隣水系の個体群からの自然な移入が望ましいことも強調しておきたい。

謝辞

本報をまとめるにあたり種々ご教示いただいた、瀧上信好氏(国土交通省遠賀川河川モニター), 林博徳博士(九州大学), 乾 隆帝博士(徳島大学), 今井秀和博士(大東文化大学/蓮花寺佛教研究所), 納富育代氏(古賀市), 阪田和弘博士(西日本技術開発株式会社)にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

引用文献

- アクロス福岡文化誌編纂委員会. 2012. 福岡県の神社. 海鳥社, 福岡.
- 青柳兵司. 1957. 日本列島産淡水魚類総説. 大修館書店, 東京.
- 福岡県環境部自然環境課. 2001. 福岡県の希少野生生物-福岡県レッドデータブック 2001-. 福岡県, 福岡.
- 古谷知新(校訂). 1910. 源平盛衰記. 国民文庫刊行会, 東京.
- 学校法人中村学園. 2012. 貝原益軒アーカイブ: 筑前国続風土記. (オンライン)
http://www.nakamura-u.ac.jp/~library/lib_data/d01.html, 参照 2013-04-01.
- 林 宏・祝原道衛・鳥潟春雄・吉田博一. 1974. 福岡県生物誌 脊椎動物編. 福岡県高等学校生物研究部会, 福岡.
- 本荘鉄夫・原 武史. 1973. 養魚講座 8 ヤマメ・アマゴ. 緑書房, 東京.
- 今井秀和. 2009. 白魚の種をまく事-「甲子夜話」に見る俗説. 日本文学研究 48: 47-59.
- 木村清朗. 1981. 九州北部におけるサケの捕獲例. 魚類学雑誌 28: 193-196.
- 木村清朗・松井誠一・早田浩文・立原一憲. 1986. 福岡県多々良川のバラタナゴおよびその生息環境. 九州大学農学部学芸雑誌 40: 239-247.
- 木村清朗・塚原 博. 1969. 有明海で獲られたギンケヤマベについて. 魚類学雑誌 16: 131-134.
- 木下盛枝. 1928. 柳河ノ淡水魚. 福岡県柳河高等女学校, 山門郡柳河町.
- 国土交通省河川局. 2005. 魚がのぼりやすい川づくりの手引き. 国土交通省, 東京.
- 国土交通省九州地方整備局遠賀川河川事務所. 2003. お魚 STREET 遠賀川. 国土交通省九州地方整備局遠賀川河川事務所, 直方.
- Kurita, Y. & Inui, R. 2012. Identification of sea bass species (Pisces, Percichthyidae) by PCR-RFLP analysis and differences in habitat use of the larvae and juveniles in the surf zones of sandy beaches in northwestern Kyushu Island. Biogeography 14: 57-63.
- 松井佳一. 1936. 実験 金魚の愛玩と飼育法. 弘道閣, 東京.
- 水野信彦・丹羽 弥. 1961. カジカ *Cottus pollux* GÜNTHER の生態的 2 型. 動物学雑誌 70: 267-275.
- 中坊徹次. 2013. 日本産魚類検索 全種の同定第三版. 東海大学出版会, 東京.

- 中島 淳. 2010. 筑後川中流域の漁業と淡水魚食文化. 魚類自然史研究会会誌ボテジャコ 15: 17-23.
- 中島 淳・及川 信・水谷 宏・松井誠一. 2004. 福岡県大根川水系における魚類相. 九州大学大学院農学研究院学芸雑誌 59: 105-112.
- 中島 淳・鬼倉徳雄. 2009. 九州におけるイトヨの記録. ホシザキグリーン財団研究報告 12: 285-288.
- 中島 淳・鬼倉徳雄・松井誠一・及川 信. 2006. 福岡県における純淡水魚類の地理的分布パターン. 魚類学雑誌 53: 117-131.
- 中島忠雄. 1976. 遠賀川流域における鮭神信仰. 西日本文化 123: 10-13.
- 中西幹代. 1961. 筑前国続風土記について. 香椎潟 7: 25-34.
- 日本魚類学会. 2005. 生物多様性の保全をめざした魚類の放流ガイドライン. (オンライン) <http://www.fish-isj.jp/info/050406.html>, 参照 2013-04-01.
- 日本生態学会生態系管理専門委員会. 2005. 自然再生事業指針. 保全生態学研究 10: 63-75.
- 遠賀川源流サケの会. 2012. 遠賀川源流サケの会-onga-sakenokai ページ!. (オンライン) <http://onga-sakenokai.jimdo.com/>, 参照 2013-04-01.
- 鬼倉徳雄・中島 淳. 江口勝久・乾 隆帝・比嘉枝利子・三宅琢也・河村功一・松井誠一・及川 信. 2006. 多々良川水系におけるタナゴ類の分布域の推移とタナゴ類・二枚貝の生息に及ぼす都市化の影響. 水環境学会誌 29: 837-842.
- 大島正満. 1957. 九州におけるヤマメとアマゴの分布. 動物学雑誌 66: 21-24.
- 大内 準. 1961. 滅びんとするオオサンショウウオ・ハジカミ淵とその伝説. 生物福岡 1: 34-35.
- 佐野二郎. 2009. オイカワ産卵場造成手法に関する研究. 福岡県水産海洋技術センター研究報告 19: 91-97.
- 佐野二郎. 2011. オイカワ種苗生産効率化に関する研究. 福岡県水産海洋技術センター研究報告 21: 73-80.
- 佐野二郎・牛嶋敏夫・稲田善和・西川 仁. 2008. オイカワ増殖手法に関する研究. 福岡県水産海洋技術センター研究報告 18: 59-64.
- Sato, S., Kojima, H., Ando, J., Ando, H., Wilmot, R.L., Seeb, L.W., Efremov, V., LeClair, L., Buchholz, W., Jin, D.H., Urawa, S., Kaeriyama, M., Urano, A. & Abe, S. 2004. Genetic population structure of chum salmon in the Pacific Rim inferred from mitochondrial DNA sequence variation. Environ. Biol. Fish. 69: 37-50.
- 佐藤俊平・山本祥一郎. 2010. サケ科魚類の遺伝構造とその成立過程. 渡辺勝敏・高橋 洋(編). 淡水魚類地理の自然史. pp. 71-85. 東海大学出版会, 東京.
- 澁澤敬三. 1958. 日本魚名集覧. 角川書店, 東京.
- 多部田修・塚原 博. 1964. 北九州における海産ウグイの産卵習性とその漁法. 九州大学農学部学芸雑誌 21: 215-225.
- 武島弘彦. 2010. アユの遺伝的集団構造に残された謎. 渡辺勝敏・高橋 洋(編). 淡水魚類地理の自然史. pp. 123-133. 東海大学出版会, 東京.
- Tominaga, A. & Matsui, M. 2008. Taxonomic status of a salamander species allied to

Hynobius naevius and a reevaluation of *Hynobius naevius yatsui* Oyama, 1947 (Amphibia, Caudata). Zool. Sci. 25: 107-114.

上野益三. 1991. 博物学者列伝. 八坂書房, 東京.

吉田 裕・伊藤建生. 1957. 日本海の魚類相. 農林省水産講習所研究報告 6: 113-122.

Izunuma-Uchinuma Wetland Researches 7: 23-37, 2013

Freshwater fishes in Fukuoka prefecture recorded by Ekiken Kaibara
in Chikuzen'nokuni zoku fudoki

Jun Nakajima

Fukuoka Institute of Health and Environmental Sciences, Mukaizano 39, Dazaifu, Fukuoka,
818-0135, Japan E-mail cyprin@kyudai.jp

Abstract Ekiken Kaibara (1630-1714) is known as the first true naturalist and biologist in Japan. The Chikuzen'nokuni Zoku Fudoki was edited by him in 1688-1709. As part of this report the author conducted a survey of the records of freshwater fish in this historical manuscript. As a result, it was found that of the 24 taxa (fish and amphibian) recorded in the book, at least 21 taxa were able to be identified at the level of species or genera. These records indicate that the habitats of amphidromous fish, *Plecoglossus altivelis*, *Oncorhynchus masou*, *O. keta* and *Tribolodon hakonensis* have diminished over the past 300 years. It was confirmed that this book provides important information about historical freshwater fish fauna in Fukuoka prefecture.

Keywords: Kyushu, herbalism, natural history, restoration, fish fauna

Received: April 12, 2013/ Accepted: May 2, 2013

